

かけだ詩⑧

そだちと臨床研究会

かわばた たかし
川畑 隆

そのままの君がいい

X線写真の肺の影は
変化していません
これは昔の炎症の跡でしょう
毎回そういう診断
今回は久しぶりのCTで
再確認された

そしてはじめて
反対側の肺に4ミリの突起が見つかった
いつから君はそこにいるのかわからない
一か月後
4ミリのままの君がいた
君もやっぱりそのままがいい

ちなみに三か月後も六か月後もそのままの君がいた。君は2年間、CT
から追い続けられるらしい。

裸の確保

よろしく よろしく
優しい気持ちを目がいっぱい語り
その下ではマスクが壁を作っている
壁といっても膨らんだりしぼんだり
さえずる小鳥の下に小鳥たちが隠れている

隠れている小鳥たちも見たくて
ちよっとだけマスクを外すのを提案する
さえずっていた小鳥は代表者を解放され
他と一群になって明確な輪郭を描ききる
その一瞬の変化に驚いた

さえずる小鳥から想像したのは
まだ漠然としたあなただった
でも あなたでしかないあなたという
とても具体的な輪郭のリアリティが
私の生きる世界を実感させた

マスクをするのがふつうの現実が引き続くと
マスクを外すのに勇気がある
丸裸の自分をさらしてしまうようだ
眼を患ったときマスクに眼帯は避けた
裸を守る権利を意識した

東京MER

鈴木亮平が主演の連続ドラマ

Mobile Emergency Room は

一人の死者も出さないのが目的の
移動型治療チーム

医者としては無謀な動きだと

チームはいつも批判される しかし

目の前に死ぬかもしれない人がいる

まだ生きているその人を助きたい

そんな理想論だけでは立ち行かなくなる

失敗すればチームは解体だ

そうですよね でも目の前に：

チームは決断し ドラマは熱を帯びる

しかしお定まりの枠にはまるのとは

ちよつと違う感覚が漂ってきた

ある施設の対人援助の力量をあげたい

そのことに力を貸してとの相談

相手にするのは施設という全体

でもそれを成り立たせているのは

一人ひとりの子どもと一人ひとりの大人

一人の大人の前にはまず一人の子どもがいる

その目の前の一人の子どもを理解せずして
どう進もうというのか

理解する力は枯渇したというのか

いや 眠っている部分がありはしないか

あきらめではない 反省でもない

自分たちの力を信じて前に進むこと

ありきたりの言い方で突き放さず

ありきたりではない道筋を作るしかない

所有物

子どもは親の所有物なんやから

なんぼ用事があるからゆうたつて

車の中や家に長いこと

忘れ物したらあかんやないか

子どもは親の所有物なんやから

同居人が子どもを殴ったりしたら

私の子に何してくれんねん！

つて怒つて止めなあかんやんか

子どもは親の所有物やないなんて

たわけたことぬかしょんやないで
子どもは親の所有物なんやから
大事にしたるやないか
毒親にもならんと

毒親：一九〇〇年代の終わりに生まれた俗語で、毒になる親の略。子どもに悪影響を与えたり、子どもが厄介と感ずるような親のこと。

むこうみず

向こうを見たら飲み込んだ
勢いは喉元を突破しそうだったが
ひるんだすきに向こうが見えた

向こうを見たら二部屋あった
おんなじ景色の続きの間と
戻る道ない離れの間

離れの間は見知らぬ不安に埋め尽くされ
続きの間には失望が惰性で座っていた
そして続きの間にまたひれ伏した

いつも向こうを見ることになる
もし見える向こうを見なければ
部屋の選択の余地はない

でも

向こうは本当に見えるのだろうか
見えていると思っただけなのではないか

見えていないのなら

むこうみずが用意してくれるかもしれない
三つ目の部屋

尊重の実質

子どもの意見の尊重と

子どもの尊重とは同じではない

子どもの意見を尊重し採用することが

子どもを尊重していかないことはあるし

子どもの意見を尊重しても採用しないことが

子どもを尊重していることもある

だって子どもは子どもなんだし

大人じゃないから

子どもの意見を尊重していかないのに採用するのは

尊重のための尊重か

子どものことは置き去りにされている

親のいい顔

親のいい顔です

長年児童相談に携わってこられて

子どもが健全に育つために重要なことって
何でしょうか

そう問われてどうにかひねり出した答え

べつに笑顔だと言ったわけじゃない

児童相談はそんなに薄っぺらくない
生きづらい世の中で笑ってばかりなんか
いられない

でもいい顔

子どもから見てたくましい顔

頼れる顔

自分を任せられる顔

十六歳のにいちちゃんも

親なんかいらなくなって顔をしてたって

あと四年で大人にならなくちゃならない

いまのこの俺がたった四年じゃ無理だつてば

でもそんなオロオロなんて

恰好悪くて見せられない

うっとおしい不安には蓋をして知らんぷり

まあそんなときまでには俺もどうにかするんちゃうか

それに

あと四年くらいは親もどうにか面倒みてくれるやろ

だいぶ面倒かけとるみたいやけど

あの顔つきやったらな

かつかつでもそう思わせてくれるような

親のいい顔です

父の死

四十一年前の十二月

父は一週間の昏睡をへて五十六歳で亡くなった

生きていたら九十七歳ということになる

昔の田舎のことで出生届が三年遅れたという説もあったから

本当は生誕百年なのかもしれない

若者の運転するバイクにはねあげられ

中央分離帯の突起に頭を打ちつけたらしい
母からの連絡を受けて脳外科病院に着くと
ICUでたくさんの管につながれていた
脳がグシャグシャの状態で

命をとりとめても植物人間の可能性が大きいと主治医は言った

二人の兄もかけつけ家族全員で交代に眠りながら
亡くなるまでをベッドサイドで過ごした

何の反応もしない状態の人間をみることはそんなになかった

ましてそれがあの父となると 現実が壁をこしらえた

そんな感覚は初めてだったから どう心を持ってばいいか慌てた

父の右だったか左だったか足のすねに窪んだ古い傷

勤務していた国鉄バスの営業所でバスにひかれた跡だと

よく見せられていた それが目の前にある

父の身体なんて触った覚えがないし 今は触ることが怖い

でも思い切って触ってみた 温かかった そして

ここに来てはじめてストレートな思いが身を貫いた

この温もりが永遠に続いてほしい 消えたらだめだ

そのときはじめて安楽死論議に意見をもった

でも父は息を引き取り冷たくなっていった

同じ病院に入院していた加害者の若者も駆けつけた

若者を許したが

葬式よりあとには一度も顔を見せなかった

許したときのやりとりを数年後に反芻した

母が警察官から父のことについて病院で聴取を受けた
持病を苦にしてバイクに自ら飛び込んだのではとの疑い

無慈悲とも思える聴取で疑いは濃くならずにすんだが
母の憔悴はみんなが辛かった

通夜と葬儀に向けてあわただしい 遺影の準備もそのひとつ

父はバスのダイヤを組む職人のような事務屋で

気の小さい人だった そのくせ見栄っ張りなところがあつた

母とぶつかる口を利かなくなるのが息子として辛かった

でも遺影の表情のなんと穏やかなことか

何か知らんけど やつとラクになったね 優しい顔だった

親戚が集まり 明日の葬式を前に酒が入っている

聴きたくもない話から避難した部屋に母も来た

父の匂いが濃厚な背広を手にとったとき号泣が私を襲った

そうよね 我慢してたよね 母も泣いた

その晩だったろうか

あれは父じゃないか 死んだはずなのに木の陰に父がいる

目が合った 走り出す私 目を逸らし慌てて逃げてゆく父

父に追いつけなかった落胆とともに目が覚めた

葬式では喪服がなく長兄のスーツを借りた 婚約中の妻も来た

次兄も私も地方公務員だったから 二人の知事からの花環は

見栄っ張りの父に少しの誇らしさをプレゼントしただろうか

気の小ささは私が引き継いでいると思う

そして、外見は私が一番よく似ているらしい 私もそう思う

父の亡くなった年齢を戸籍上で十歳越えた